



第2章 人々の暮らしと自然

さどがしま

佐渡島の農業



佐渡島の農業は、佐渡金山ではたらくために増えた人の食べ物をまかなうために、早くから発達してきました。イネの「佐渡コシヒカリ」や、しぶ柿を加工してつくる「おけさ柿」は全国的に有名です。

佐渡島でできる農産物にはどんなものがあるか、みてみましょう。

佐渡島でつくられているおもな農産物

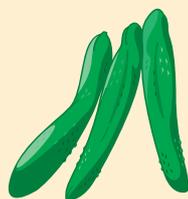
資料：JA佐渡、JA羽茂／佐渡地域振興局調べ

 <p>佐渡島の代表的な農産物だよ。</p>	 <p>イネ</p>	 <p>おけさ柿</p>
<p>つくっている農家の数</p>	<p>5979戸</p>	<p>1117戸</p>
<p>出荷されている量</p>	<p>およそ26364トン</p>	<p>およそ5487トン</p>
<p>販売金額</p>	<p>およそ61億3000万円</p>	<p>およそ13億9000万円</p>

そのほかの農産物



ネギ



キュウリ



トマト



タマネギ



イモ類



キノコ類



イチゴ



西洋ナシ



リンゴ



イチジク

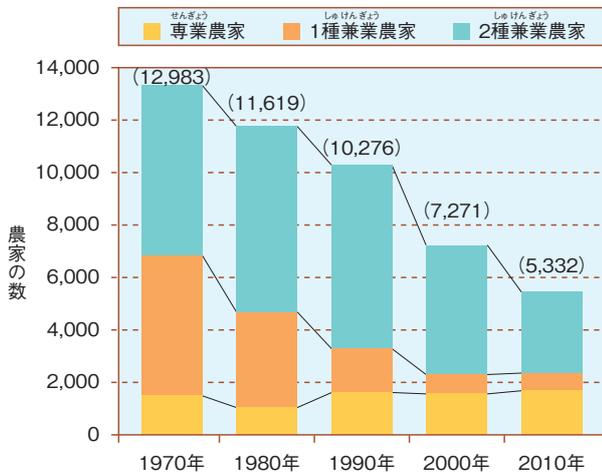
伝統野菜

- ・本カタウリ（白ウリの一類）
- ・千本ネギ（分けつの多いネギの一類）
- ・八幡イモ（サトイモの一類）

佐渡島の農業はどう変わったか

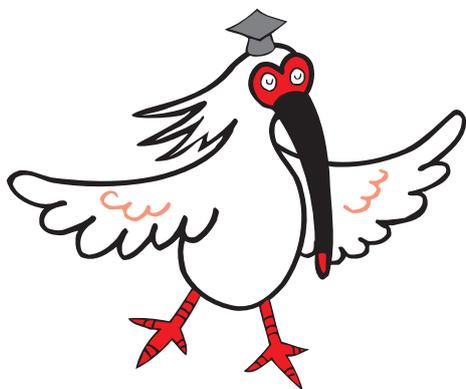
佐渡島の農業は、およそ40年前と比べてどう変わったのでしょうか。農家の種類や数、農業にたずさわる人々の数など、データで調べてみましょう。農家の数のうっぴりかわりのグラフをみると、

第1種兼業農家の数が大きく減っているのがわかります。これは、農業だけの収入では経営が成り立たなくなって、農家の人が農業以外の仕事をすることになったためです。



佐渡島の農家の数のうっぴりかわり (1970～2010年)
資料：農林水産省「世界農林業センサス報告書」

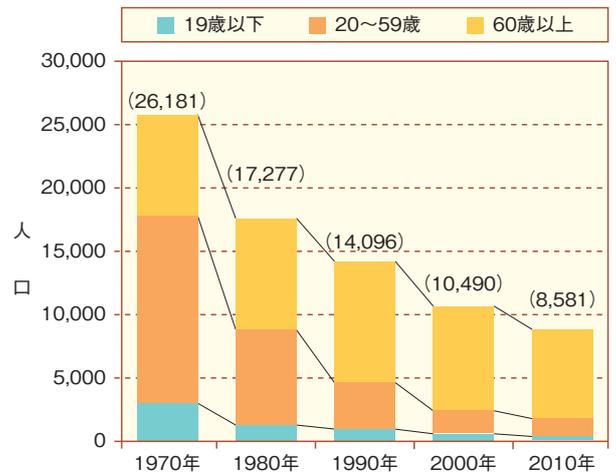
農家の種類	
専業農家	家の人全員が農業の仕事をしている農家のこと。
第1種兼業農家	家で、農業以外の仕事をしている人がいて、農業の収入が農業以外の仕事の収入よりも多い農家のこと。
第2種兼業農家	家で、農業以外の仕事をしている人がいて、農業の収入が農業以外の仕事の収入よりも少ない農家のこと。



農業にたずさわる人が減っているのはとても残念なことじゃ。
佐渡島には、日本全国に誇れるお米やおけさ柿などがあるのにのう。

40年前と比べて、農業にたずさわる人の数も減っています。とくに、20～59歳の人（働き盛りの人）は、農業以外の仕事につく人が多くなりました。また、子どもたちの数が減っていることもあって、19歳以下の人で農業にたずさわる人の数も減ってきています。

現在の農業にたずさわる人の数は全体的に減少し、若い人々が農業からはなれてしまったため、結果として60歳以上の年齢の高い人々が、佐渡島の農業を支えることになったのです。



佐渡島の農家の年齢別人口のうっぴりかわり (1970～2010年)
資料：農林水産省「世界農林業センサス報告書」

田んぼはお米をつくるための場所じゃない！

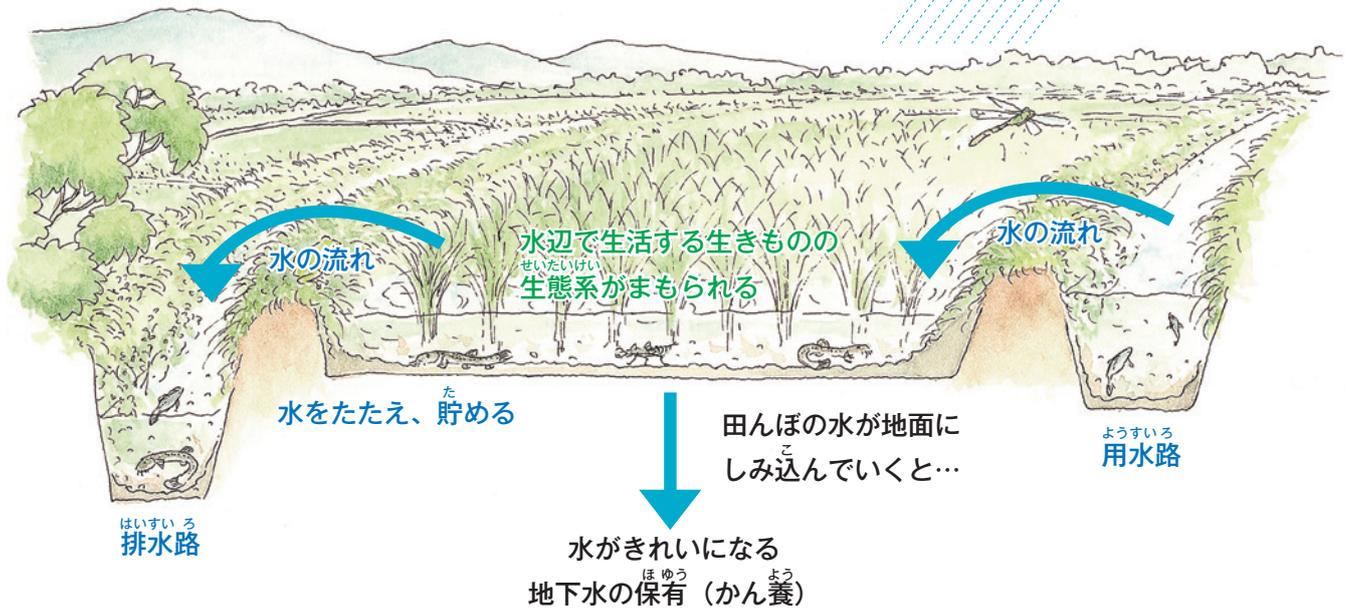
佐渡島のあちこちにみられる田んぼは、実はお米をつくるためだけでなく、いろいろな機能をもっているのです。



田んぼによって美しい景色がまもられる。

わたしたちのえさになる生きものがたくさんいるよ。

雨



田んぼは“自然のダム”の役割も…

田んぼは、森とともに“自然のダム”とよばれます。大雨で降った水をためて、洪水を防ぐことができます。日本全体の田んぼの貯水量は、およそ51億 m^3 あるといわれています。これは日本全国のダムが貯水量を調節する能力のおよそ2倍の量です。また、田んぼの水が蒸発することで、まわりの気温を下げて涼しくするはたらきや、水をきれいにし、地下水として保有する能力（かん養能力）ももっています。

このように、田んぼはお米をつくるためだけでなく、わたしたち人間や、生きもの全体の生活に欠かすことのできない、たくさんの恵みを与える場所なのです。

豆知識

圃場整備事業

昔は、お米や野菜づくりはほとんどが人手で行われていたので、田んぼや畑は小さい方がよかったです。トラクターや田植機が登場し、機械化がすすんできたことで、農作業の効率を高めるために、1960年代の終わりごろから、田んぼの形や大きさをそろえる事業が行われました。これを圃場整備事業といいます。



品質のよい牛を全国に—佐渡島の畜産業

佐渡島は肉牛の生産でも全国的に有名で、「佐渡牛」というブランドの名前がついています。もともとは江戸時代に、佐渡金山の開発で材料などを運ばんする仕事や、人口が増えて田んぼや畑を新しく開墾するときに活躍した牛です。また、田んぼや畑の堆肥をつくるのにも役立ちました。

1950年代になってこうした仕事は機械化されたり、化学肥料が登場したため、牛の役割も減ってきました。このため、食べる肉を生産するために牛を育てるようになっていったのです。



牛を育てる仕事は、たいへんな労力と手間が必要です。この仕事にたずさわる人が減り、高齢化がすすんだこともあって、牛の生産量は減少し、すい退していました。

しかし、芝生で放牧され、自然の中で育った健康な牛は、最近見直されています。新潟県などの自治体と、牛を育てる人たちやそれを売る人たちが協力して、「佐渡牛」の生産を活発にするための努力を続けています。

安全な作物をつくって、環境にもやさしい—環境保全型農業

第二次世界大戦以降、日本の農業は機械化がすみ、作物の成長を早め、たくさんとれるように化学肥料を使ったり、作物を病気からまもるために農薬を使ったりと、農業のやり方は大きく変わりました。

しかし、それによって、田んぼやそのまわりをすみかにしていた生きものたちがいなくなり、排水路から有害な物質が川や海に流れ出たりして、わたしたちの健康にも影響が出るようになりました。

そこで、環境をまもるために農業のやり方を見直そうという、「環境保全型農業」が注目されるようになってきました。化学肥料や農薬をまったく使わないか、使う量を減らして、環境をまもるとともに農作物の安全性を高めようというものです。化学肥料や農薬を減らす農業を計画的におこなって、県知事から認定を受ける「エコファーマー」が、佐渡島では2005(平成17)年には一人もいなかったのが、3年後の2008(平成20)年には約2000人になり、

環境保全型農業のおもなタイプ	
有機栽培	化学肥料や農薬をいっさい使わない農業のやり方。除草剤を使わないので、雑草をかり取る仕事が必要だ。
特別栽培農産物	化学肥料の成分や、農薬を使う回数を減らしてつくった農産物のこと。ふつうは割合を50%まで減らしたものをいうが、30%まで減らす方法も増えている。

環境にやさしい農業をしようと努力する人たちが着実に増えています。